

平成 20年 5月 18日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007 - 2008

課題番号：19530746

研究課題名(和文) 教育における平等と日本版能力別指導・トラッキングの国際比較研究

研究課題名(英文) Equity in Education and the Japanese Model of Ability Grouping & Tracking: A Comparative Perspective

研究代表者

氏名(アルファベット) 恒吉 僚子 (Ryoko Tsuneyoshi)

所属機関・所属部局名・職名 東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号 50236931

研究成果の概要：

本研究テーマである、教育における平等とトラッキングの問題は、国際的には学業不振層や人種、民族的マイノリティの児童生徒の教育への機会均等、社会的公正や社会的再生産の問題と絡められて、極めて関心の高い領域である。そのため、西欧諸国等においては、脱トラッキング (detracking) はしばしば学校の民主主義的な使命の実現、階層格差を学力格差へと転換させまいとする立場から推進されてきた。

例えば、アメリカにおいても、脱トラッキングをこうした趣旨から進めてきた学校も少なくなく、同質的な学力編成に対して、協同学習 (cooperative learning) 等が、異質な学力層が共に学ぶことができる方法の一つとして、しばしば提唱されてきた。あるいは、PISA における高得点で知られるフィンランドにおいても、総合学校における能力別指導の撤廃等、脱トラッキングが類似した発想から支持されてきた。

そうした中で、初等教育段階で「学校内トラッキング」を行ってこなかった日本は、しばしば国際的には平等主義的な傾向を持つ国として称賛されてきた。だが、その日本では今日、初等教育においても例えば、習熟度別指導が積極的に導入され、「格差社会」の議論も盛んになりつつある。こうした中で、教育における平等との関係で日本版トラッキングの特徴を、国際的議論に貢献しうる形で、フィールドワークに基づきながら、組み直すのが本研究の目的であった。

本研究では、「トラッキング」(tracking) を、広義にとらえ、アメリカ等において焦点化されてきた教室・学校レベルの学力・能力によるグループ分け (例 能力別指導、職業コース) に絡んで生じる課題群 (例 教育実践上の課題) と、日本において従来最も研究されてきた高校間格差を軸としたよりマクロな枠組みとを統合しながら、社会的公正、マイノリティ、教育の機会均等等の概念を軸として、日本版トラッキングの分析を国際的な equity と tracking のディスコースにのせて再構築を試みた。また、日本国内のニューカマーの多文化教育的研究や塾分析等、従来の高校間格差を軸としたトラッキング研究とは視点・系譜が異なった研究領域の成果を、上記軸をもとに統合的に扱うことによって、国際的議論の枠組み近づけながら、日本版トラッキングの特徴をより浮き彫りにしようとした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	1,300,000	390,000	1,690,000
20年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：社会学、トラッキング、習熟度別指導、国際比較、マイノリティ、教育の機会均等、学業不振

1. 研究開始当初の背景

子どもを能力や学力を指標にして同質な集団に分けて指導する能力別指導やトラッキング (tracking) は、欧米諸国においてはマイノリティや学業不振層の教育への機会均等に反するものとして、社会的公正や社会的再生産の問題と絡められて議論されてきた。例えば、トラッキング「先進国」のアメリカにおいても、脱トラッキングの取り組みを行う学校は多く、協同学習 (cooperative learning) 等、学力、民族その他が異なる生徒が協同して学ぶ方法が模索されてきた。あるいは、PISAにおける高得点によって世界的に注目されているフィンランドにおいても、総合学校での能力別指導を廃止し、社会的平等と質の双方の向上を実現しようとしてきた。

だが、日本においては、諸外国においては問題となってきたマイノリティの権利保障の視点や階層格差の視点は弱く、社会的公正との関係で議論されることがほとんどないまま、習熟度別指導等のいわば「日本版学校内トラッキング」の新たな形の導入が進められてきた。そもそも、日本の場合は、トラッキングがしばしば国際的には問題になってきた、学校内の選別や機会均等の問題としてよりも、日本の教育制度の構造的な特徴から来るマクロな高校間格差をめぐる議論が多く、国際的な議論との論点の違いが認められた。

こうした状況を背景として、国際的に議論されてきた教育実践や学校内の組織編成との関係におけるトラッキング、学力同質な集団での指導の問題と equity を結びつけた視点が有効だと考えた。

2. 研究の目的

1. の研究背景を受け、日本版トラッキングの特徴を、ミクロな教室レベルの視点と、日本の教育制度の特徴から派生する、学校間格差のマクロな視点とを統合的に扱い、社会的公正の概念を軸に、国際的な議論につながる形で再構築することが研究目的の第一の柱であった。こうしたプロセスを、アメリカとシンガポールでの現地調査を通して、海外協力者と協同しながら、国際比較視点から日本の特徴を浮き彫りにしようとした。

また、単に、国際的議論にのせられる形で日本の事例を組み直して理解し直し、そのことによって新しい知見を得ようとしただけ

ではなく、結果に至る多国間の研究者・大学院生の意見交換を通して、参加者が、異なる視点を獲得していく学びのプロセスを重視した。特に、参加した日本人の大学院生に関して、アメリカ、シンガポールの海外協力者と意見交換を行ったり、アメリカで国際学会のセッションを組み、英語での国際学会での発表の実習を繰り返すと共に、国際的議論とひきつける形で日本の事例を組み直すことの意味が何であるかの研究会を定期的に開いた。そうした視点からそれぞれがフィールドワーク等によって得たデータを組みなおした。

3. 研究の方法

当初の計画に沿って、日本、アメリカ、シンガポールでの政策関係者、教師、児童生徒のインタビューと学校観察とを行った。アメリカにおいては、海外協力者の支援を受け、メリーランド州のアフリカ系アメリカ人生徒の多いプリンス・ジョージズ郡とその周辺の階層の異なる学区、ワシントンDC市内で調査が行われた。事例研究的に、人種的・階層的構成が異なる場で、学校内のトラッキング制度がどのように展開しているかを、学校間トラッキングと組み合わせつつ調査した。

シンガポールにおいては、シンガポール版トラッキング(ストーリーミング)が緩和され、変容しつつある政策の背景を教育省の政策関係者を中心にインタビューした。また、学校観察、特に、複数回、初等教育の卒業試験を通過できなかった児童のために新しく設立された学校〔ノースライト校〕を中心に、本テーマに関連したシンガポールにおける課題を、アメリカの海外協力者、シンガポールの海外協力者と共に調査した。

また、日本の調査においては、外国人児童生徒、学業不振層が多い学校等、何かしらの意味で本テーマにとって鍵となる学校のフィールドワークを土台に、社会的公正を軸に日本版トラッキングの特徴を具体的に分析して国際的な社会的公正とトラッキングをめぐる議論に対応させようとした。また、教育実践としてのトラッキングを中心に、既存研究を整理し、争点を浮き彫りにしていった(恒吉 2008年参照)。

4. 研究成果

本研究の最大の研究成果は、日本版トラッ

キングの特徴を、教育の社会的公正と平等、equity の概念を軸としながら、国際的なトラッキングと社会的再生産、教育の機会均等々に関連した議論の枠組みでとらえ直した点にある。

日本においては民族・人種的マイノリティ（あるいは「外国人」教育）は独自の研究領域を形成し、「外国人」や異文化的背景を持つ子どもの研究として位置付けられ、日本人児童生徒を研究している研究者と必ずしも一致しない。そのため、外国人児童生徒は、学業不振や中退率の高さ、高校進学に伴う格差問題等、日本人の学業不振層と基本においては共通する課題群を多く提示しながらも、両者の領域の関連付けは従来は必ずしも意識されてこなかった。また、日本の外国人教育の研究は、それが用いる概念（例 エスニシティ）は国境を越え、それが提示する問題も多くの国で教育問題において共通して中核的なものであるにも関わらず、国際的な枠組みからこの問題に接近しようとした研究はあまり多くなかった。

外国人生徒も含めた学業不振層の教育や学校外教育をも含む形で、国際的な equity と tracking をめぐる議論の枠組みで日本の特徴を位置付けし直したことが本研究の一番の特徴であろう。こうした国際的に議論されてきたテーマの日本的なヴァリエーションとして、海外協力者からのインプットを得ながら、国際比較視点から問題提起した。

第二の成果は大学院生教育に関連したものである。日本における教育研究は一部の分野を除いて国際化が遅れている分野である。そのため、本研究で扱ったような社会的公正とトラッキングに関わる問題も、国際的には英語話者によって、日本の外からの枠組みで語られ、その枠組み作りに日本人研究者はほとんど関与してこなかったというのが実情である。そうした中で、本研究では、国際的な議論を視野に入れた本研究テーマの組み直しや大学院生の国際学会での発表演習を意識的に組み入れた。プロジェクト結果はアジア学会（アメリカ）でセッションとして発表、英文報告書としてまとめ、海外研究者からの建設的批判やコメントを得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔報告書論文〕(計 5 件)

Ryoko Tsuneyoshi, Hideki Ito, Satoshi Otaya, Tomoko Tokunaga, Izumi Mori, and Sim Choon Kiat, "Tracking and Equity in the Japanese Educational Context." Pp. 1—22 in *Equity in*

Education and the Japanese Model of Ability Grouping and Tracking: A Comparative Study (教育における平等と日本版能力別指導・トラッキングの国際比較研究、基盤C)の報告書。

Ito, Hideki. "The Non-Mainstream Upper Secondary School Track in Japan." Pp. 23-30 (same as above)

Tokunaga, Tomoko. "The Minority Track in Japan: The Case of the 'Newcomers'" Pp. 31-39 (same as above).

Fukuda, Shiori. "Encourage Schools': Efforts to Save At-Risk Students in Japan." Pp. 40-55.

Ee, Teo Juin. "Northlight School, Singapore." Pp. 55-58 (same as above).

〔学会発表〕(計セッション1件)(審査有り)
本プロジェクトの代表者がアメリカのアジア学会にて本プロジェクトのセッションを組織し、海外協力者、大学院生、PDを含めて成果を発表した。

Association for Asian Studies, Japan section, panel number 39, Tracking and Equity in the Japanese Educational Context, March 27th, 2009, Chicago.
司会 Barbara Finkelstein

発表者

恒吉僚子(代表者)

伊藤秀樹(東大、博士)

御旅屋達(東大、博士)

徳永智子(Univ. of Maryland)

森いずみ(Penn State)

Sim Kiat Choon (東大、研究員)

〔図書〕(計 1 件)

恒吉僚子

『子どもたちの三つの「危機」 国際的に見た日本の模索』勁草書房、2008年(この中の学力・習熟度別指導のセクションが本プロジェクトによる)総211ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

氏名 恒吉 僚子 (Ryoko Tsuneyoshi)

所属機関・所属部局名・職名 東京大学
教育学研究科・教授

研究者番号 50236931

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

丸山 千歌 (横浜国立大学、留学生センター)

海外協力者

Barbara Finkelstein (Univ. of Maryland)

Christine Lee (NIE, Singapore)

プロジェクトに参加した大学院生

伊藤 秀樹 (東大、博士)

御旅屋 達 (東大、博士)

徳永 智子 (Univ. of Maryland)

森 いずみ (Penn State)

Sim Kiat Choon (東大、研究員)

Teo Juin Ee (NIE, Singapore)